ケモノ女は俺の嫁！

henka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ケモノ女は俺の嫁！

【Ｎコード】
Ｎ０９７９Ｌ

【作者名】
ｈｅｎｋａ

【あらすじ】
ドタバタコメディーです。

ＹＯ！　ＹＯ！　俺は気楽に人生を生きる大学生ヒューマ。
イキナリだが、俺は今、絶体絶命の危機に瀕している。適当に茶化して一刻も早くこの危機から脱したいところなのだが、今回ばかりはそんな雰囲気ではない。実を言うと、ちょっと浮気（？）をしてしまったことが嫁にバレてしまったのだ。初めてこの話を聞いた君は大学生なのに嫁？と思うだろう。しかし、俺には親父と親父の友人のおじさんが、青春時代に固く結んだ約束のせいで、生まれた時から嫁がいるのだ。「許嫁」と言う今のこの時代にそぐわない嫁が――

「ねぇ、ちょっと聞いてるの？」
フェネが怒りを抑えた声で俺を詰問する。
「聞ーてる聞ーてる」
ダメだ。俺の体はこれまで適当に人生を生きてきたせいですぐ適当に返事を返してしまうようになっている。
「ヒューマ！　何？　その態度。サークルの女の子に手を出したんでしょ？　この浮気者！　私という嫁がいながら……」
フェネは両手の拳を固くしてワナワナと震えている。やべぇな、そのうち殴られるかな、俺。でも、浮気ってこれは浮気なのか？
「ちょっと待て！　何度も言っているが、お前は物凄く勘違いしている気がするぞ。手を出したって、飲み会で酔い潰れた女の子を家まで背負っていっただけじゃないか」
「わかってるわよ！　その後、×××や●●●をやってんでしょ？
このサイテーヘンタイ下衆野郎！」
「あほォゥッ！　やるわきゃねぇだろうが！」
「信じない。ヒューマが女の子に手を出さないなんて……私は信じ

ない……」
フェネは両手で耳を塞ぎ、イヤイヤと首を振って拒絶反応を示す。
どうしたらいいんだろうこの人。頭が痛い。誰かタスケテクレぇー……
生まれた時からずっと一緒にいるのにどうしてこんな風に育ってしまったのかシャーロック・ホームズでも解けない迷宮入りの謎だが、フェネは被害妄想が激しい。フェネにはイギリス人の血が流れていて顔はイギリス人とのハーフでかなり美人なのだが、嫉妬深い性格が超絶厄介だ。
「麻美が言ってたもの。ヒューマはニヤニヤしてたって」
「アイツ……」
麻美は同じサークルの同期だ。ちなみにフェネも同じ大学に通っているのだが、フェネは母親との魔法の修行があるのでサークルに入っていない。トンでも話だがフェネは魔女見習いなのだ。
「ヒューマ……嘘を突き通す気ね」
「いや、だから、何もしてないって！」
「もういい。ちょっと反省しなさい！」
「おい！　妄想で済ませてないで俺の話を聞け……って、あぁ！」
フェネの瞳の色が濃い茶色からコバルトブルーに変化していた。

「ハムスターにでもなってなさい！」

「？青眼？使うとか卑怯な……あぐぅっ！」
古来より、魔女の瞳は青いと言われている。フェネも普段は日本人よりの濃い茶色の目の色をしているが、魔法を使う時は青くなるのだ。
フェネの青い眼を見てしまった俺は体を変化させられてしまう。

フェネは何故か「人を動物に変身させる」魔法しか使えない。自分では変身できないくせに、小さい頃から他人を動物に変身させる才能だけはピカイチだったせいで、近所の子はほとんど全員、フェネの逆鱗に触れた時点で何回か動物に変身させられている。おかげでフェネは？ケモノ女？というあだ名をもらっている。まぁ、一日経てば変身は解けるからそんなに生活に支障はないが。

フェネがハムスターになっとけって言っていたから、俺はハムスターに変身させられるんだろう。体全体が縮んできた。着ていた服がブカブカになっていく。鼻の両側に白い髭が伸び、同時に鼻が顔の前へと少し突き出ていく。前歯がニョキニョキと長くなり、耳は丸くなって頭の上の方へと上がっていく。体中からモサモサと黄金色の獣毛が伸びてくる。反対に、自慢の赤色に染めた髪が頭の中へと吸収されてしまう。手足がより小さくピンク色に変わり、体全体がぶくぶくと膨れて丸々したハムスターの体型になっていく。お尻から気持ち程度にゅっと短いしっぽが生えて、俺の変身は終わった。

「よーしそれじゃあ、籠の中で一日車輪回しの刑ね」

ペットを飼っていないのに、最近、籠を買ったのはこのためだったのか！　ハムスターになった俺はゾッとした。車輪を一日中回し続けるなんてまっぴらごめんだ。

「ほら、大人しく私に捕まりなさい」

フェネが俺を大きな手で捕まえにくる。

「誰が捕まるか！　俺は無実だ！」

「まだそんな事を言う……」

何故か動物に変身してもしゃべれるのは不思議……って今はそれどころじゃなかった。俺は持ち前の運動神経を発揮してフェネの手をくぐり抜ける。

「すばしっこい……ハムスターにしたのは失敗だったかしら」

フェネは困った顔をした。こういう素直な反応をするところは可

愛いんだけどなぁ。
フェネは根性で俺を捕まえようとしてくる。しかし、俺は無実。フェネが勝手に浮気したと思い込んでいるだけだ！
俺は無実を認めさせるため、反撃に出ることにした。

「ひゃぁっ！　ちょっと、ヒュー……きゃはは、こしょばい、きゃはは」
俺はフェネが俺を捕まえようと前屈みになった瞬間、フェネの胸元から服の中に飛び込んだ。俺はフェネの服の中で走り回る。すると、フェネはくすぐったいらしく笑い声をあげる。
「きゃはは、やめっ、ヒュー、きゃはは」
「俺は浮気なんてしてないって認めないとやめないぜ」
「そんっ、あっ、くそぉ……」
「ほらほら、このままだとパンツの中まで入っちゃうぜー」
「だめぇっ！　くそぉ……こうなったら……」
フェネは手鏡を出して、コバルトブルーの瞳で自分を見つめた。
「ん？」
服の中にいた俺はフェネの体が変化し始めたことに気が付いた。まさか、自分で変身できるようになったのか！？

「うわぁっ！」
フェネの体中から黒い毛が伸びてくる。俺はその黒い毛の中に埋もれてしまった。フェネは体が縮み始め、自慢のムネが小さくなる。服がブカブカになり、俺は先に地面に落ちた。
「痛ッテェ……」
前足で頭を擦りながら上を見上げると、フェネは変身の途中だった。
全身が黒い獣毛に覆われ、耳は三角に尖って頭の上方へ移動し、鼻と口先が前へでっぱる。白い髭が鼻の両側に伸び、手のひらにぷにぷにした肉球ができる。お尻からは棒状のしっぽが突き出てくる。

俺はフェネが変身していく様子を見ているうちに青ざめてきた。
パサッとスカートやらブラジャーやら着ていた服が地面に落ち、中から出てきたフェネの姿は――
「にゃ～。逃がさないわよ」
「ひぇー！！」
フェネは黒ネコに変身した。

「おい！　自分で変身できるようになったなんてって聞いてないぞ！」
「鏡で自分を見れば変身できることに気付いたのよ」
「そんな手が……」
「さぁ、追いかけっこしましょうか」
フェネは俺に標準を合わせて、体勢を低くし、お尻をフリフリさせる。これはマズイ。ネコがする狩りの体勢だ。
俺は一目散に走り出した。しかし――

「つーかまーえた」
「ぎゃー！　動けないー！」
弾丸のように飛び出してきたネコフェネにすぐに捕まってしまった。俺はフェネの前足に軽く踏まれ、口に銜えられて、籠の中に入れられてしまった。
「ほら、車輪回して！　食べるわよ！」
「俺は悪くないのにー」

俺は泣きそうになりながら籠の中で車輪を回した。しかし、フェネも丸一日ネコから戻れないことに後から気付き、二人で動物のまま一日過ごすこととなった。
前言撤回。毎日心労が絶えない俺。でもまぁ、何だかんだ言って、嫁とはうまくやってるぜ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0979l/

ケモノ女は俺の嫁！

2010年10月8日15時22分発行